



米沢市 ●●●●●

なおえかねつぐ

直江兼続が安全を願った龍師火帝の碑「猿尾堰」

よねざわしすももやま わき りゅうしかてい ひ いし
 米沢市李山を流れる松川の脇に「龍師火帝の碑」という大きな石が
 あります。この石碑はなおえかねつぐ さるおぜき こうずい かん
 直江兼続が、猿尾堰を守り、洪水や干ばつがおき
 ないことを祈って置いたものといわれております。

けいちょう うえすぎ し えち こ げんにいがたけん あいづ げんふくしまけんあい
 1598年（慶長3年）上杉氏は、越後（現新潟県）から会津（現福島県会
 津）に移されました。その後、藩の重臣である直江兼続は町を作るため
 よねざわ ほり ようすい ちすい
 に米沢にやって来たのでした。お堀や町を広げたり、用水・治水（洪水な
 どの水害をなくすため、川を直したりすること）に力を注ぎ、松川にある
 なおえいつづみ
 直江石堤などもつくりあげました。

それから3年後、領地を減らされた上杉氏が、6千人の家臣を引き連
 れ米沢にやってくることとなりました。当時の米沢の人口が約6千人で
 したので、それと同じ人数の人が移り住むこととなったため、藩では早
 きゅう ひつよう よねざわし みなみはら ほうせんまち しゅうだん
 急な町づくりが必要となったのでした。米沢市の南原、芳泉町に集団で
 うつ あれち つく
 移り住むこととなり、荒地となっている土地を畑や田んぼに造りかえて
 いったのです。当然のことながら、作物を作るためには水が必要となり、
 その水を引くために作られた水路が猿尾堰でした。

さるおぜき こんなん なましば
 猿尾堰の工事は思っていたより困難なものでありました。生柴（生き
 えだ さるおづみ ほうほう
 ている木の枝）を使つての猿尾積という方法で作られた取り入れ口が、
 一夜の大雨により形がなくなるほど押し流され、働いている人たちに多
 くのぎせい者が出たり、責任者である武士が切腹したという悲しい出来

ごと あと せつぷくぜき げんざい
 事もあり、何度も作り直した工事の跡が「切腹堰」とよばれて現在でも
 見ることが出来ます。

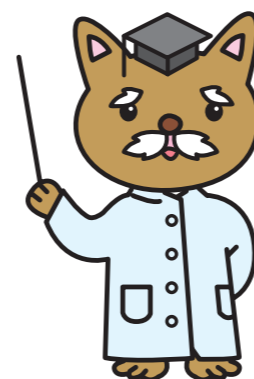
そのような大変な工事によって完成した猿尾堰に、直江兼続は「龍
 しかてい ひ た しょうらい ぶじ いの くらう くらう
 師火帝の碑」を建て将来の無事を祈り、人々たちの苦勞を供養したの
 でした。



龍師火帝の碑



今も残る猿尾堰跡



なおえかねつぐ にいがたけん うえすぎけ かるう はんせい かつやく よねざわ
 直江兼続… 1560年～1619年新潟県に生まれ、上杉家の家老として藩政に活躍し“米沢
 かいたく だいおんじん
 開拓の大恩人”といわれております。
 さるおづみ えだ
 猿尾積… 木材をひし形に組み、中に木の枝に包んだ石を積み上げ、水を堰き止める方法。
 りゅうしかてい ひ かくほ こうずい かん
 龍師火帝の碑… 用水を確保し、洪水や干ばつから村人たちのくらしを守るため、水の神「龍師」
 かのてい
 火の神「火帝」の力を借り守り、助けを願うため建てられたものといわれてお
 げんざい よねざわし ぶんがざい ほぞん さるおぜき
 ります。現在は、米沢市の文化財として保存されており、今も猿尾堰の安全と、
 よねざわ さしづい いの
 米沢に災害が起こらないことを祈るよう建てられています。

【参考文献 直江兼続と猿尾堰 龍師火帝の碑に関する古文書】